

日本人児童を対象としたシンセティック・フォニックスの多面的効果検証

木澤 利英子 (東京大学大学院教育学研究科 大学院生)

研究の背景と目的

2020年、小学校高学年で英語が正式な教科となり、高学年では「読み書き」の指導が導入される。しかし、日本人児童を対象とした英語の読み書きに関する実証的研究は少なく、何をどう指導すべきかについて知見の蓄積が急がれる。

中学校で多くの生徒が困難を抱える単語学習には、その前提となる下位スキルとして、音韻認識力、文字認識力、そして両者の対応に関する知識(フォニックス)が必要であることが指摘されている。そこで本研究では、以下の3点を目的とし、実践及び調査を行った。

- 1) 実際の小学校教育現場で、長期的な介入および定期的な効果測定を行い、その効果を多面的に検証する。【研究1,2】
- 2) 指導の有無による影響を検討するために、異なる地域間で児童の特徴について比較を行う。【研究3-1】
- 3) 受けてきた指導が、児童の英語学習観や動機、効力感や動機づけに及ぼす影響プロセスについて検討する。【研究3-2】

研究1の概要

対象: 奈良県明日香村の小学校に在籍する1年生～6年生児童、計245名。

実践内容: 1年間、外国語活動の中にフォニックスの指導を導入した。『Jolly Phonics』を教材として使用し、英語の音と文字の対応について指導した。4月、7月、2月に「非単語反復課題」および「デコーディング課題」による技能の測定を行った。2学期からは、シンセティックアプローチの最大の特徴であるブレンディング活動(既習の音をつなげて単語を読む活動)も行い、当アプローチの効果についても検証した。

結果: 2つの課題とも、時期を追うごとに成績が向上した。ただし、そこには学年による差が見られたため、今後は指導回数や導入形態、児童の発達段階やローマ字知識の影響などについてより詳細に検討していく必要がある。

研究2の概要

対象: 東京都小金井市の小学校2校に在籍する6年生全児童、計205名。

実践内容: 研究1と同様の実践を行い、4月、10月、翌3月に測定を実施した。本研究は、指導者が地域人材であること、技能だけでなく心理的側面に及ぶ効果についても扱ったことが特徴である。

結果: 介入前の実態として、学校外英語学習経験の有無によってアルファベット書字力や音韻認識力に有意な差が存在することが示された。しかし全体として、時期を追うごとに小文字書字力、音と文字の対応知識、音韻認識力だけでなく、読み書きへの効力感も向上した。また、読みへの効力感が高いほど事後の動機づけが高まっていることが示された。

研究3の概要

対象: 研究2の対象、および大阪府貝塚市の小学校に在籍する6年生児童、計341名。

調査内容: フォニックス指導を導入した小学校としていない小学校の児童を比較し、指導の影響について検討した。授業目標の認知、英語学習観、英語学習動機、4技能の効力感、動機づけの5側面について両校の比較を行った。さらに、測定した変数間の影響プロセスについて検討を行った。

結果: フォニックス非導入校では、授業の目標として「レクリエーション」的な側面を強く認知していること、フォニックス導入校では読むことに対する効力感が有意に高いことが示された。また、変数間の影響プロセスについて検討したところ、図のような結果が得られた。

全体考察

児童の英語学習に対する信念や動機づけは、受けている指導によって影響を受けることが明らかとなった。フォニックス指導によって、技能だけでなく効力感の向上も見られたことで、中学校1年生の終わりをピークに減退する学習意欲を保つための一つの手立てを示すことができたとと言えるだろう。

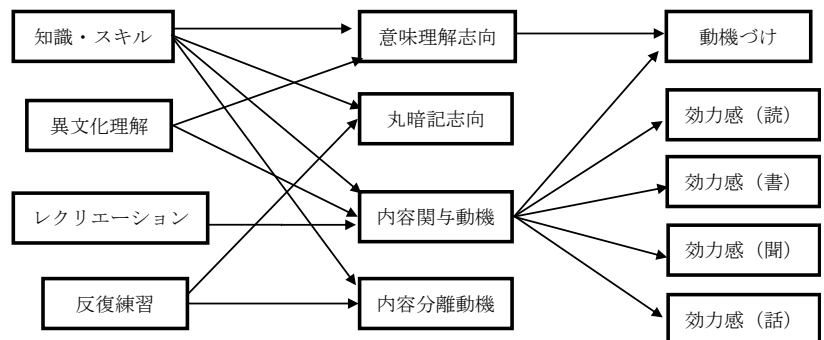


図 変数間の影響プロセス